希
のぞみ

希　03

藤沢みや（miya）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=14810575

ヒュンマ

ダイ大　ヒュンマ小説です。twitter/miya_haniwa555
本編が終わってから二年後にダイが見つかり、しばらく経った後のお話です。ヒュンマ、ポップ→←メルル、ダイレオ、アバフロ前提でお話が進んでいます。
◇マァム視点　◆ヒュンケル視点
不穏な終わり方をしますが、ハッピーエンド至上主義なのでご安心ください。
PixivさまのTwitterリンクは驍泰アカにルーラします。

希　03

◆

　街で立ち寄る場所――――レオナに指定されたその場所は、二人からすれば豪奢と呼べる王族の別荘のような宿屋だった。
　ロマンティックなファーストキスといい、パプニカ王国の姫君はとことん状況を楽しんでいるようだ。しかも、ヒュンケルの感性には任せられないという無言の意思をしみじみと感じる。
　残念ながらなにも反論ができない。
　賭けてもいいが、立ち寄るだけでは終わらないだろう。時間も指定されていて、今は夕方。もしここに泊まらないということになれば急いで別の宿を探すことになるが……そんなことにはならないだろう。
「ここ……なの？」
　マァムが口をぽかんと開けて驚いている。
「……お使い……だよね」
　その呟きに、ヒュンケルは苦笑いを浮かべるしかなかった。
　案の定、中に入ってみれば二泊三日で上客向けの部屋が予約されていた。支払いまで済んでおり、しかも食事まで付いているという至れり尽くせり。ヒュンケル当てに要約すれば『楽しんでね』というメッセージまであった。
　目眩がしそうだ。
「……いっそ楽しまないともったいないわね」
　マァムはそう覚悟を決めるかのように頷いて、ヒュンケルに話し掛けてきた。たぶん、姫とマァムの楽しむはだいぶ違う。
「そうだな」
　そう言うしかない。
　案内された部屋は予想よりも落ち着いてはいたが、質の良い調度が揃っているのがわかる。ヒュンケルにとっては頑丈で、壊すのに時間がかかりそうというのも判断基準のひとつだ。
　二人で一部屋。宿屋の主人の口振りから、自分たちのことを夫婦

だと認識しているようだった。オレもマァムも否定はしなかった。
　マァムは部屋の中をきょろきょろと見渡すと、室内探検に出掛けてしまった。
　そんな彼女の後ろ姿を、微笑ましい気持ちで見送る。
　ヒュンケルは街の屋台や店で仕入れた旅の荷物を検分し、纏めていく。実際に広げ、少し力を入れて素材を確認する。それ程大荷物な訳ではないが、纏めるとそれなりの量になった。
「ヒュンケル！　お風呂が、凄いの！！　獅子の頭みたいなのから、ドバーってお湯がっ」
　ぱたぱたと近づいてきて、見つけた面白いものを教えてくれる。
「そうか……今日はゆっくり浸かるといい」
　彼女が傍にいる。それだけで心がこれ程落ち着くのかと自分でも不思議になる。
　俺の言葉にマァムは頬を朱に染める。
「うん」
　照れたような笑顔に、何度も思った可愛いという単語が脳内に溢れる。
「なにしてるの？」
　隣にぽすんと腰掛け、机上のものを眺める。他人の荷物というのは端から見ている場合は面白い物だ。興味津々な様子に微笑する。
「買った物をまとめていた……ああ、このまま話をしたいのだが」
　言ってから言葉を濁す。
「だが、先に食事にするか」
　屋台で肉串を食べたりしたが、本格的に夕食を食べた訳ではない。
「そうね」
　ふにゃりと笑まれてつい頭を撫でてしまう。マァムは素直に俺の手を受け入れる。その姿に愛しさが溢れ出しそうになる。
　……このまま、ここで押し倒してしまいそうになるが、堪える。
「五階のレストランよね」
　マァムが、部屋に設置されている宿屋の案内図を見て朗らかに笑う。
　幸福にしたいと心の底から思っているのに、穢したいと思ってし

まうのは男の性（さが）なのだろう。俺は彼女の手を取って立ち上がった。

　レストランでは名前のよくわからない洒落た料理が出てきた。
　マァムはある程度はわかるようで、嬉しそうに、わかる物には楽しそうに説明をしてくれ、一皿一皿味わって食べていた。
　そんな姿を見ていれば食事にあまり価値を見いださなかったのに、俺も同じように味わっていた。
　不思議なものだ。
　誰といるかで、味がかなり変わる。
　このレストランの食事は旨い。
「ヒュンケルは甘い物も平気なの？」
　食後のデザートを食べていると、マァムが首を傾げる。
　そういえば甘い物を食べない戦士は多い。甘味よりも肉のがいいという声もよく聞く。自分もどちらかと言えば肉派だ。
「……食べられるな。好んで食べたいとはあまり思わないが」
「無理しなくてもいいのよ？」
「これくらいの甘さなら大丈夫だ」
「じゃあ、デザートを作る時はあまり甘くならないようにするわね。お母さん直伝のアップルパイ、だいぶ上手に焼けるようになったの」
「楽しみにしている」
　未来の約束に瞳が蕩ける気分になる。
「……私、ヒュンケルの好きなもの、全然知らないのね」
　食後のコーヒーを飲みながらマァムが長い息を吐き出し、少しばかり唇を噛む。
「私はミルクと砂糖をたっぷり入れて飲むけど、ヒュンケルはなにも入れずに飲むのね……そんなことすら知らないなんて、なんだか悔しい」
　可愛らしい嫉妬に頬が緩みそうになる。
「それならオレもだ……これから、オレにもおまえの好物を教えて

くれ。オレも伝えるようにする。たくさん話そう」
　そう言えば、ぱっと顔を上げて笑う。
「ええ！」
　魔王軍にいる時は会話ではなく命令でしか口を開かず、それ以降は比較的会話はしてきたが、相手を思いやって包み込みたいと思って話などしてこなかったから、今の状況がとてもくすぐったい。
　純粋にオレを理解したいと思ってくれる相手。
　彼女……マァムだからこそ、その感情を嬉しいと思うのだ。別の誰かのそんな思いはただ申し訳ないだけ。そうとしか思っていなかった。対象が違うとここまで感情が変わってくるのか。
　オレは続きの話をしたいと彼女に告げ、飲み物をもらって部屋へ促した。

　◇

　部屋に戻って、長椅子に並んで座る。
　机の上にはレオナからの『密命書』という名の、彼女のお遊びに満ちた指示書があった。見せるなと言明されていたそうだが、「もう、おまえに見せても支障はない」とヒュンケルは苦笑していた。
　確かに、今なら見ても支障はない気がする。
　綺麗な湖、素敵な宿屋、夜景の綺麗な小高い丘、可愛い雑貨の売っているお店、素敵なドレスを扱っている専門店。綺麗な湖と、素敵な宿屋は既に訪れている。
　変なところで素直なヒュンケルが、苦々しく思いながらもレオナの指示に従っていた姿がなんだか可笑しくなってしまう。
　確かに……ロマンティックなファーストキスだった。
　つい、自分の唇に触れて真っ赤になってしまう。
　ありがとうと言えばいいのか、ばかと言えばいいのか……くすりと近くで笑う声が聞こえたと思ったら、いつの間にか彼の膝という

か左太腿の上に乗っていた。
「ヒュ？？？」
　変な声が出た。
　その自分の出した声に吃驚している私をヒュンケルはやさしく抱き締めて、耳殻の辺りを撫でる。
　手つきはやさしいが、なんだかゾクゾクする。
「レオナ姫が決め付けていたが……三ヶ月後に結婚で、本当に構わないか？」
　先程話がしたいと言っていたのは、このことなのだろうか。
「うん、ヒュンケルは？　私はとても、嬉しい」
　自分の気持ちを素直に告げれば、ヒュンケルは目元を緩めて「オレも嬉しい」と返してくれる。
「あと……ここから本題だが」
　空気が重くなる。
　これからが、本題？
「オレは……おまえにヴァージンロードを処女のまま歩かせてやりたい」
「！？」
　あまりの話題にマァムは赤面する。顔中の水分が蒸発してしまいそうだ。
　直截（ちょくせつ）的過ぎる。
「だが、正直に言ってマァムが傍にいるのに、触れないように我慢をするのは難しい」
「っ！　ヒュ！？」
　腰に左手を回され、頬に右手を添えられる。
　そして深いくちづけ。
　まだ慣れていないくちづけに翻弄されてしまう。気持ちが良いけれど、恥ずかしくて居た堪れなくて、でも欲されていると思えて嬉しくて……
「っん……ぁは……」
　満天の星の浮かぶ湖で練習したから、呼吸はだいぶ出来るようになった。肩や背中を撫でる手が、やさしく労るような動きとはちょっとばかり違って……ふにゃりと乳房に触れられ体が強張る。

マトリフおじさんやポップに触わられる時のような拒絶感はないけれど、物凄く悪いことをしている気分になる。
　ふにふにと右手で左乳房を揉まれる。左耳を軽く噛まれて、囁かれる。
「息をしろ」
　命令だけど、その突き刺さった囁きで体がようやく動く。
　どうやら固まっていたらしい。
「……嫌か？」
　間近にある顔は微苦笑を浮かべていて、あの二人たちのような厭らしい顔はしていない。きっと自分が嫌だと言えば、彼は結婚式まで我慢をしてくれるのだろう。
　――――厭らしい男たちの視線。
　――――疎ましげに眺めてくる女たちの視線。
　あまり気にしないようにしてはいたけれど、思い返せば年齢よりも生育の良い自分の体は、値踏みされるように見つめられることがままあった。
　男はそんなものだから。
　女は嫉妬するのが通常。
　そんな言葉で濁されてきたけれど、私はそれが厭だった。
　どうして、他人の体をそんなふうに不躾に眺めたり、自分の欲望のままに触ったりできるの？　女だから「そう」って決め付けるの？　と不可解で仕方がなかった。
　だから、自分がどう見られているか、どう見ているかということを無意識に切り離していたのかもしれない。
　起こったことには殴り付けて対処して、どうして触るのかを深く考えないようにしてきていた……内心で怖かったから。きっと。
　ヒュンケルが女の人にそんな触り方をするところは見たことがなかったけれど。
「ヒュンケルは、触りたいの？」
　小首を傾げて尋ねれば、目の前の彼は頬を朱に染めて、先程まで私の胸に触れていた右手で自分の鼻と口を押さえて目線を逸らした。
「正直に言えば、触れたい。肌に直接」

耳まで真っ赤になっている姿に、釣られて自分まで顔が真っ赤になる。
　口に当てられた大きな手。筋張って指が長くて綺麗な大人の男の人の……好きな人の手。その手が自分の体に触れていた……
「触れて……」
「……いいのか？」
　ヒュンケルは戸惑っているようだった。
「嫌だったら、いつもみたいに殴って止めさせるけど……たぶん、ヒュンケルが相手だと、そんなことに、ならないと……思う」
　こういう気持ちが『女としての欲』というものなのだろうか。
　今までずっと逃げてきた感情。
　私を見て。
　私と話して。
　私とキスして。
　私に触れて……
　私を、愛して。
　逃げ続けた感情に向き合ってしまえば、溜め込んでいた感情は急激に溢れ出す。
　彼の右手を口元から外して、自らの頬に当てる。
　あなたの姿を瞳に映したい、話したい、キスしたい。
　あなたに触れたい。
「……あなたに、愛して欲しいの」
　欲にまみれた言葉にヒュンケルが息を呑む。
「今までのどの戦場で味わった衝撃よりも、上をいった」
　おおげさな言い様に笑ってしまう。
「もう、おおげさね」
「おおげさじゃない」
「でも……私、なにも知らないから……お手柔らかにね」
　照れてそう言えば、ヒュンケルがやさしく目を細めて「わかった」と答えてくれた。
　重なる唇。
　私も両腕を彼の首に回して応える。
　好きな人が、自分に触れたいと思ってくれる……それって、なん

て幸運なのだろう。
　私は彼のくちづけに応えながら、伏せていた瞼をうっすらと開ける。
　長い銀の睫毛。
　なんて綺麗。
　好きだなぁ。心の底からそうしみじみと感じて、そして今があることを心から感謝した。

　きっと故郷に帰っても、彼のことを忘れることなんてできなかったと思う。
　彼の幸せを遠くから勝手に祈って、自己満足に浸って、慈愛を振りまいて生きていくしか自分には考えられなかったはずだ。悪い生き方ではないけれど、たぶん周囲の人には気を遣わせただろう。
　理想の正義を振り回していた十代の私。
　子供の私が感じていた、正義に基づいた真っ直ぐで愚直な愛。
　ある種、理想論の愛。
　自分を否定したくないけれど、年齢に合った愛し方があるのだろうとここ最近は感じている。
　正義に突き進んだ愛は、ある種の凶器だ。その凶器に打ち砕かれて感銘を受けてくれた人がいたのは僥倖だった。
　あの時、あの場所でなければ、この人の心には届かなかったと思う。
　誰彼構わず垂れ流すように愛していた猪突猛進な十六歳の私。振り返ると、あまりの幼さに自分ながら目眩がしてしまう。
　きっとアバン先生は心配だったろうな……
　でも、その猪突猛進があったから、ヒュンケルは私の傍にいてくれる。
　根本的な考え方は変わっていないけれど、言ってもいいのか、相手は受け入れてくれるのか、理解してくれるのか……せめて、話を聞いてくれるのかは考えるようになった。

若さ故の暴走。
　切り付ける言葉のナイフ。
　それが本当に偶然、彼の心に刺さった。
　――――偶然の奇跡。
　運命とか宿命とか、そんな言葉じゃ物足りない。
　ほんのちょっと間違えていたら、こんなふうに彼の膝の上にいることはできなかっただろうから。
　様々な愛に恵まれているのだ、私は。
　だから、この恵まれている分を慈愛として注ごう。まずは私の目の前の人に。
「ヒュン、ケル……っん」
「っん……どう、した？」
　くちづけの合間に問われる。
　とてもやさしい瞳。
「ありがとう、大好き」
　もうあなたが大事にしてくれた私の慈愛を、私は振りまけないかもしれない。一人の人を愛する、自分のための愛を知って臆病になってしまったから。
　こんな私を知ったら、あなたは軽蔑するかしら。
　きっと、私は変わってしまった。あなたを愛することで。
　でも、この変化を私は嫌だとは思えない。
　すべてを愛する心も純粋な正義も、私の大事な核だった。
　ヒュンケル一人を一人の女性として愛する私も、大事な核。
「礼を言うのは、オレの方だ」
　抱き締められて、首筋に囁かれる。
　耳元で聞こえる穏やかな声に背筋がぞくりと跳ねる。聞き心地のいい素敵な甘い声。
　ずっと……こんなふうに抱き合ってくちづけをしていたい。
　広い胸の中に囲まれていたい。
「マァム」
　名前を呼ばれて見上げれば、抱き上げられて思わず彼の首に縋り付く。そのまま寝台に運ばれ、下ろされた。きしりと軋む音、布がこすれる音にそれだけで悪いことをしているみたいでドキドキす

る。
　心臓がバクバクと大きな音を立てて高鳴っている。
　世の恋人同士というのはこんなことができてしまうのか……なんだか凄い。
　ヒュンケルが片膝を寝台について、覆い被さるように近付いてくる。肩を軽く押され、背中を支えられる。
　ぽすりと寝台に横たわった私の視界には、ヒュンケルしかいない。なんて贅沢な眺めなんだろう。思わず感じたことに自分で可笑しくなってしまう。
「……随分、余裕だな」
　顔の両脇に彼が手を付く。
　上から覆い被されて、逃げられない。逃げる気なんてないけれど。
「視界にヒュンケルしかいないって、贅沢だと思って」
　笑顔で感じたことをそのまま言えば、彼が動きを止めた。
「それはオレの言葉だ……」
　しみじみと呟く彼に笑ってしまう。
　なんてやさしい人。
「……そういえば、モルグさんが言っていたわ。ヒュンケルはやさしい人だって」
　ああ、私はなんて卑怯な女になってしまったのだろう。過去のあなたを知っているのは、私だけだという露骨な意思表示みたいだ。
　でも……
　まだ三年すら経っていないのに、随分昔の話のようだ。
「あなたの部下の方達は、本当にあなたを慕っていた」
「……ああ、オレにはもったいない部下達だった」
　少しだけ悲しそうな顔。
「モルグさんたちも、あなたのお父さんも……結婚式にご招待したかったわ」
　彼の頬を両手で包む。
「やさしい声をしていらしたわ、バルトスさん。私がお義父さんってお呼びしたら、凄く吃驚されたでしょうね」
「ああ……そうだな。父は何度もおまえに礼を言うだろうし、モル

グは泣く代わりに鈴をいつもより多く鳴らすだろうな」
　力を抜いた笑いに微笑み返す。
　消したい過去、消すべき過去を持っているのは私だけじゃない。彼だって抱えている……
　あの淋しい目を知っているから、私は目の前のこの人から視線が離せなくなった。
「過去も今も未来も……いろいろなあなたを教えて」
「ああ、マァムも……ネイル村に着いたら思い出と一緒に村を案内してくれ」
「ええ」
　世界がヒュンケルで覆われる。
　なんて……やさしい檻なんだろう。
　マァムは自分の考えに笑みを浮かべる。
　きっと……彼を捕らえたのは私。私の檻なんかにかかってしまった、可哀想な人。
　……あなたを好きになって、私はとっても狡くなってしまった。
　もう、十六歳の真っ白な正義を振り翳す私は……見当たらない。

了